



プラネタリウムへようこそ ～ 星空を創る人々の知られざる世界

青木 満 著

地人書館, 255 頁, 定価 1,800 円 (外税), ISBN 4-8052-0592-X

読み物

お薦め度
☆☆★★★

日本には、プラネタリウムを持つ施設が 300 以上ある。プラネタリウム解説者は人気の高い職種で、公募にはその数十倍の応募がある。

最近まで私はプラネタリアン（プラネタリウム解説を含む業務を行なう一種の専門職）だった。この本にある事例の大半は私も遭遇しているか、友人の体験として聞き及んでいる。私はせめて常勤で働きたかったのだが、他人には現状ではこの仕事はあえてお勧めはしない。

日本のプラネタリウム（以下「プラネ」と略）界は今までに 3 つの世代を経てきた。機械のフルマニュアル操作、および生解説の第 1 世代、1970 年代に入って本体と各種の補助投影機をコンピューターで制御させて番組を構成する第 2 世代が擡頭した。そして 1980 年代半ば、傾斜型座席を伴う「宇宙型」プラネ、第 3 世代の時代が始まった。本書にはこのうち第 1 世代プラネ館に通いつめた思い出話、第 3 世代のプラネ現場における裏話、およびプラネの楽しみ方が紹介されている。（著者の退職後、従来の恒星・惑星棚という構成を廃し、魚眼レンズでコンピューターグラフィックス画面をドームに投影するデジタルスターなどの全く新しいシステムも登場してきたが、この新勢力は日本では当然大勢に影響しないだろう。）

日本に存在するプラネ館は、館により運営母体、職員の身分、機械システムから番組形態まで全て異なるが、不思議なことに抱えている問題は大体どの館でも同じである。新設館の場合も、責任者が視察したはずの近隣館と同一の問題をご丁寧に踏襲している例は少なくない。こういう事態を何とかしようと、現場からの情報公開として既設館の持つ問題、プラネ施設設置基準の考察、職員に要求される資質と採用後の研修方法などをまとめる複数の

試みがなされてきた。この本はプラネ愛好者向けに書かれているようだが、むしろ、プラネタリアンが従来あえて外に漏らさなかった貴重な情報が含まれていると私は思う。それは、プラネとはいかに厄介な機械であり、投影を正常に完了するためにどれだけの機転と労力が投入されなければならないかという事実である。著者は数年前に某プラネタリウム館を退職とあるのを見て私は納得した。なるほど現役ではここまで書くわけにはいかないだろう。

自動操縦が売りもののはずの機械システムがしばしば故障する。投影の最中でもお構いなしだ。それも日頃の点検で防止できるとか、備えあればというのでなく、予想を超えたあらゆる箇所でトラブルが発生する。3 年間の館勤務で「結果的には何とかあった」事例をこれだけ拾えるのだから、プラネタリアンの日常は実際綱渡りのようなものなのだ。もちろん仕事は機械の「お守り」だけではない。

他人事ならば、笑い話ですむ。エピソードごとについて小見出しは気がきいていて興味をそそる。しかし内容は私には笑えなかった。私が現場にいた数年間にも、知り合いが何人もプラネから姿を消していった。プラネタリアンは実際創意工夫が求められる非常に面白い仕事である。しかし、数倍の志願者から選ばれて就職した熱意ある職員を 5 年と引き止められない業界に未来はあるのだろうか。

プラネ愛好者よりもむしろ、自分の意志と関係なくプラネに関わることになった人、プラネタリアンと協力して魅力ある施設を運営しようとしている人に読んでほしい。

最後に一つ苦言を。お客様を「老婆」とは、いただけない（195-196 ページ）。そもそも、この場面では年齢を強調する必要もない。

後藤真理子（国立天文台天文情報公開センター）